早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文審査報告書

論　文　題　目

大都市の伝統住居密集地域における
居住環境の変容と近代化

−北京南鑼鼓巷とソウル北村の事例を通して−

Change and Modernization of Dwelling Environment in Densely Built Traditional Residential Area in Metropolis

-A Case Study of Nanluoguxiang, Beijing and Bukchon, Seoul -

申　請　者

李　東勲

Donghoon　LEE

建築学専攻　建築空間論研究

2016 年 2 月

中国北京や韓国ソウルなど東アジアの大都市では、経済成長期の急速な近代化の中で、都心部に残る伝統住居密集地域が都市人口増加の受け皿となり、歴史性のある都市居住環境を今日にまで残してきた。これらの地域では時代に伴う社会や周辺環境の変化に生活空間を適応させるため、伝統的住居群の改修や更新がなされている。そこでは持続可能な都市居住環境の再生が期待されているが、近代化に伴い住居群の形態や機能が少なからず変化しているため、その歴史的価値が認識されないままに、伝統住居群の解体や再整備が進められている。本論文の著者は、グローバル化する現代社会において、これらの地域の存在がローカルなアイデンティティを高める要素となること、歴史的建造物の活用への社会的関心が高まっていること、住民の生活様態にマッチした都市公共空間を提供できることなど、都市に残る伝統住居密集地域の可能性とその再評価に着目しており、従来に無い独創的な研究として高く評価できる。

また、都市近代化の過程での伝統住居密集地域の維持と更新を、単なる歴史性の毀損ではなく地域持続再生のプロセスとして捉え、「都市組織」の概念を援用して建築と都市の変容や秩序を考察している点にも、既往研究に見られない新規性がある。都市に残る伝統住居密集地域は、それぞれに固有の背景に基づいて形成されており、これまでその考察結果を一般的な建築計画にまで応用することには限界があった。ここでは、複数の地域における事例の比較・考察を通して、個々の都市の研究からは見出しえない、歴史ある都市に共通する特徴を明らかにした点が評価できる。さらに伝統住居密集地域の原型保存ではなく、維持と更新を通して歴史性と現代性を併せもった都市居住環境を形成する過程を、東アジアの都市における建築・都市計画手法への新たな手掛かりを示すものとして捉え、従来の伝統的住居地域研究とは一線を画する「街路体系」の変容に注目した斬新な研究方法を試みている。

具体的には、維持と更新を経て多様な都市機能・住居形態が共存する都市事例として、規則的な都市構造を持つ北京・南鑼鼓巷（ナンロウグゥシャン）と、非規則的な都市構造を持つソウル北村（ブックチョン）の２つの都市を取り上げ、両都市の伝統住居密集地域が、いかにして社会的・経済的な変動に柔軟に適応しながらも過去からの秩序を保ってきたのかを明らかにした点が評価に値する。

本論文は、序論二章、本論四章、結論一章で構成されている。

序論第一章では、社会的・経済的な影響を受け入れながら持続している伝統住居密集地域の価値認識の必要性を示している。その上で北京とソウルにおける伝統住居地域に関する既往研究を精査して論点を整理し、本研究の位置づけを述べている。

序論第二章では、都市に残る伝統住居密集地域を歴史的な環境として捉え、文献および事例をもとに歴史的な環境の概念を整理し、その意義についてまとめている。また研究方法として「都市組織」の概念を用いて、地域単位を

対象とする研究に必要な分析要素を選定している。さらに都市構成要素である「街路体系」と建築との相互関係性を取り上げ、分析方法としてスペースシンタックス理論による街路空間構造の概念と分析指標の適用可能性を示している点が独創的である。

第三章以降は本論であり、はじめに北京とソウルにおける歴史的・地理的な都市コンテクストと伝統住居密集地域との関係を整理している。またその関係性より、研究対象地域が伝統住居地域としての質を現在まで維持していること、近代化の過程で残された立地的・社会的な要因を究明している。

第四章では、北京南鑼鼓巷の伝統的な四合院密集地域の実態調査より、四合院の変容類型と街路体系との関係、ならびに四合院密集地域の維持と更新について分析、考察を行っている。具体的には四合院 34 棟の実測調査を行い、四合院の変容原因として複数世帯の共同生活と増築物による雑院化、周辺地域の都市化と観光地化による商業化を取り上げ、住居空間の変容程度と傾向を調査している。また街路空間構造の分析より、南鑼鼓巷の街路体系では南北方向ならびに東西方向の胡同が、方位に応じて周辺地域との関係性が異なることを指摘した上で、胡同の方向性と四合院の住居空間配置の関係に規則性が見られることを指摘したことは重要である。住居空間の変容類型と街路体系との関係を分析して、周辺地域と関連性が高い街路空間構造を持つ南北方向の胡同では、住居に新たな都市機能を受け入れるための形態的、機能的な変容が起こりやすいこと、また、周辺地域と関連性が低い東西方向の胡同の場合、四合院の住居配置との関係が低い胡同南側を中心に四合院の形態的な変容が起き、四合院の住居配置との関係が高い胡同北側では、本来の伝統的な住居空間が維持される傾向があることを明らかにした点はこれまでに無い考察である。このように四合院密集地域では、街路体系と四合院の関係によって異なる様態の維持と更新が起きる特徴を指摘している。さらに社会的・経済的な影響によって街路体系と四合院の関係が多様化し、既存の居住環境への新たな要求を受容可能にする都市居住環境形成のプロセスを、綿密な調査に基いて考察した点が特筆して評価できる。

第五章では、ソウル北村の韓屋密集地域における街路体系の変化が、住居地域の維持と更新に与える影響について分析・考察を行っている。北村では非規則的な街路体系をもとに住居地域が形成され、1930 年代以降の都市型韓屋地域の開発や都市整備と共に街路体系が増加したことで、形成時期と性質の異なる複数の街路体系が混在することに着目し、時期ごとの街路空間構造の分析を通して伝統住居密集地域の特徴を考察している。つまり北村では 1920 年代まで外部からの接近性が低く住居地域の変容が起きにくい地域であったが、都市型韓屋地域再開発後の 1960 年代から 1980 年代にかけて、地域への接近性が上昇したことで変容の起こりやすい地域へと変化し、1990 年代以降の幹線街路整備によって住居地域の周囲と内部の街路空間構造の関係がさらに変化するなどの、街路体系の変化に伴う街路空間構造の多様化が

起きたことを指摘している。さらに多様化する街路体系と住居地域の利用実態との相互関係を分析し、街路空間構造の違いが住居地域の維持と更新に影響を与えることを明らかにした。その上で重なり合う街路体系の特性が、北村において住居地域の維持と更新に伴う多様な要素の共存を可能としていること、周辺地域との関係や既存住居地域の維持に伴って都市居住環境が形成されたことを指摘した点は重要である。

第六章では、北京とソウルに見られる伝統住居密集地域の維持と更新について、街路体系の特徴を用いて比較・考察しており、この論文の最も独創的な部分となっている。著者は、近代以前の都市構造の違いによって北京とソウルの都市構造や住居類型の形態は異なるが、北京での街路体系と住居類型の規則的な関係性や、ソウルでの街路体系の重なり合いなど、近代化とともに街路体系が多様化する共通点があったことを指摘している。さらにこうした街路体系の多様化が、近代化の過程で都市に残った伝統住居密集地域の維持と更新に影響を与えた普遍的な要因であることを明らかにし、地域持続再生における街路体系の役割と、その重要性を指摘したことは本研究の主要な結論として高く評価できる。

第七章は結論であり、各章で得られた研究成果をまとめた上で、今後の建築計画の中での伝統住居密集地域研究への展望を示唆して本論文全体のまとめとしている。

以上を要するに、本論文は近代化の過程で都市に残った伝統住居密集地域に内在する「都市組織」と「街路体系」の特徴を明らかにし、独自にその変容の過程をつぶさに調査して、伝統住居密集地域内での住居群の維持と更新が、周辺環境の変化に適応可能な生命力を育み、都市居住環境の形成と地域持続再生を導いたことを示す先駆的論文と言える。また急変する東アジアの建築・都市空間において、多様な要素の共存がもたらす独自のアイデンティティの形成と、今後の都市居住環境形成への応用可能性に対する独創的な考察がなされており、建築計画の分野はもとより都市計画の領域に対しても寄与するところが大である。よって本論文は博士(建築学)の学位論文として相応しいものと認める。

2016 年 2 月

論文審査員

主査	早稲田大学教授		古谷誠章
副査	早稲田大学教授	工学博士(早稲田大学)	入江正之
副査	早稲田大学教授	工学博士(早稲田大学)	渡辺仁史
副査	早稲田大学准教授		藤井由理